

忘却

植松成美

サイドミラーに

可能性の断片が転がっている

何かをびたびたと巻き込むゴムの音は

枯れた落ち葉を 花を

巣から出た蟻を 狸を

昨日会った人を

記憶にないものを

あの人の影を

あり得る肢体をくくり付けて

引きずる

意思のある昆虫のように

前進する

道路は後退を許さない

泳がれる髪の毛

食べたいが過ぎて

会いたいが流れて

行きたいが消えた

飲めそうな星も

分厚いおとしたまも

透けた敷布団の柄も

ああ、アブナイ

通り過ぎた意識の断面がいくつも転がっているのが

サイドミラーには映らない

バックミラーは現実ではない

確かに進んでいる

不確かなレールに乗って

きみまみれの血を

きみだらけのアザを

ひきずりながら

気づいたら 120km/s

景色は変わらない

もう行くしかない でもどうしよう

森に入った途端

初めて君に追い抜かされて

窓にベタリ

曇っているわたしの肉体

目隠ししたきみを乗せてどこまで走ること何時間

進んだ分だけ重さを増していく星は

まだ地図にない惑星の

小さな国の集落を壊してもなお

再び関節は隆起し

四肢は芽生え

進み続ける

進んでいる